



TITLE:

京大広報 No. 626

AUTHOR(S):

京都大学広報センター

CITATION:

京都大学広報センター. 京大広報 No. 626. 京大広報 2007, 626: 2449-2466

ISSUE DATE:

2007-09

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/196463>

RIGHT:



京大広報

No. 626

2007. 9



京都大学オープンキャンパス2007
—関連記事 本文2451ページ—

目次

〈大学の動き〉

- 「第10回京都大学国際シンポジウム:活地球圏科学」
を開催……………2450
「京都大学オープンキャンパス2007」を開催 ……2451
連続公開シンポジウム「倫理への問いと大学の使命」
第1回を開催……………2452

〈部局の動き〉

- こころの未来研究センター設立記念シンポジウム
「こころの探求」を開催……………2452
寄附研究部門の設置……………2453

〈寸言〉

- 人生最大の財産は「人」 平田康夫……………2455

〈随想〉

- 未練 名誉教授 坪内良博……………2456

〈洛書〉

- 所変われば…… 高山佳奈子……………2457

〈話題〉

- 第10回「高校生のための化学～化学の最前線を聞く・
見る・楽しむ会～」を開催 ……2458

- ひらめき☆ときめきサイエンス—ようこそ大学の研究室へ—
「地下浸水時の怖さを体験しよう」を開催……………2458

〈計報〉……………2459

〈公開講座〉

- 第5回市民講座「宇宙と物質の神秘に迫る
～物理科学最前線～」……………2460
教育学研究科附属臨床教育実践研究センター公開講座
『イメージにあらわれる「文化」と「意識」
—光と影の象徴表現—』……………2461
京都大学森林科学公開講座「森を食べる
—森と木と健康—」……………2461

〈お知らせ〉

- キャンパスメンバーズ等のご案内 ……2462
総合博物館平成19年秋季企画展
「生態学が語る不思議な世界 生物の多様性って
なんだろう？」……………2463
「テクノ愛'07」……………2463

〈日誌〉……………2464

〈隔地施設紹介〉

- フィールド科学教育研究センター 瀬戸臨海実験所
……………2465

京都大学広報センター

<http://www.kyoto-u.ac.jp/>

大学の動き

「第10回京都大学国際シンポジウム：活地球圏科学」を開催

7月26日(木)から28日(土)の3日間にわたり、インドネシアのバンドン工科大学およびシェラトン・バンドンホテルにおいて、「第10回京都大学国際シンポジウム：活地球圏科学」を開催した。本学から、理学研究科、工学研究科、地球環境学堂、生存圏研究所、防災研究所および東南アジア研究所の教員ならびに大学院生が参加し、本学の基本理念の一つである「地球社会の調和ある共存に貢献」を念頭に、いわゆる Active Geosphere(活地球圏)内の変動連関をめぐる統合的理解とその知見の地域社会、国際社会への有効な伝達を目指し、多角的な対話を進めた。報告は、熱帯域のフィールド科学に立脚する先端研究のみならず、関連分野の学術史的展望や、科学的予見の適切な表現方法、これからの地球科学者に期待される資質といったことがらにも広がった。



開会式で挨拶する尾池総長

出席の研究者、大学院生数は約200人。参加は、日本、韓国、中国、台湾、フィリピン、ラオス、ベトナム、タイ、マレーシア、シンガポール、インドネシア、インド、バングラデシュ、ナイジェリア、イギリス、アメリカ合衆国の、計16の国と地域。本学からの出席者は28人であった。議論は、文化の多様性、年齢層の広さが活かされつつ展開した。なお、報告者の所属機関のうち、海外のものには、バンドン工科大学、インドネシア科学院、ミシガン大学といった大学間学術交流協定締結機関のほか、プリンストン大学、カリフォルニア工科大学、中国科学院、欧州中期気象予報センターなどを数えた。

初日は、バンドン工科大学講堂において開会式が行われ、横山俊夫国際交流推進機構長・副学長による京都大学国際シンポジウムの歴史と性格についての説明のあと、尾池和夫総長が主催者として挨拶。

続いてバンドン工科大学の Djoko Santoso 学長、日本学術会議の河野 長 東京工業大学名誉教授、インドネシア研究技術省の Bambang Sapto Pratomosunu 副大臣からの祝辞が寄せられた。オープニング・セッションは、シンポジウム実行委員長の余田成男理学研究科教授の21世紀COEプログラム活動報告から開始。そのあと会場をシェラトン・バンドンホテルに移し、翌27日午前にかけて、流体地球圏を中心としたセッション、活地球圏研究におけるインドネシアの重要性を考えるセッションがあり、午後は Tangkuban Parahu 火山と Lembang 断層の地学巡検を実施。

最終日には、固体地球圏を中心としたセッション、地球圏史学や計測技術研究を軸とした統合セッションのあと、「熱帯域の人間の諸活動のための活地球圏科学」と題するパネル討論が、ジェームズ・モリ防災研究所教授の司会のもとに開かれた。議論は主に国際共同研究と教育をめぐって、会場からの多くの発言を巻き込みつつ展開。予定時間を延長、「活地球圏科学の若さ」ゆえの困難と魅力を確認して終了した。

なお、このシンポジウム開催をご支援いただいた、バンドン工科大学、日本学術会議ならびに財団法人京都大学教育研究振興財団に謝意を表します。



パネルディスカッションの様子

(国際部)

「京都大学オープンキャンパス2007」を開催

京都大学オープンキャンパス「あなたを待つ、探求と創造の扉。」が8月9日(木)・10日(金)の両日、全国各地から高校生、保護者、引率者等約8,500人の参加のもとに開催された。

今年で6回目を迎えるオープンキャンパスは、初日を総合人間学部・文学部・教育学部・法学部および経済学部の文系5学部、2日目は理学部・医学部・薬学部・工学部および農学部の理系5学部に分けて実施した。

オープンセレモニーは時計台記念館百周年記念ホールを会場として、両日とも500人の定員で行われ、オープンキャンパス委員会・小島専孝委員長の司会進行により、はじめに東山紘久理事・副学長から「ようこそ、オープンキャンパスへ」と歓迎の挨拶があり、続いて尾池和夫総長が「京都大学をめざす皆さんへ」と題して、京都大学の歩みと現状そして未来について語った。

その後、京都大学応援団による力強い演舞とユーモアを交えた熱いエールが送られ、参加者から盛大な拍手が沸き起こった。

最後に「在学生からの熱いメッセージ」と題して、初日は人間・環境学研究科修士課程2年(総合人間学部)の渡 寛法さんが、2日目は理学研究科博士課程1年(理学部)の西岡辰磨さんが、それぞれ自らの受験や就学体験を熱く語り、オープンセレモニーは閉会した。

時計台記念館国際交流ホールには、入試・学生生活・就職・留学およびキャンパスライフ等の相談コーナーが開設され、参加者や保護者からの相談や質問に職員が答えた。また、同ホールでは、参加者と在学生が受験勉強や学生生活に関する様々なことを、親しく語り合う在学生交流コーナーが設けられ、両日とも大勢の参加者で賑わい、熱気溢れる中でも和やかな交流風景が見られた。

この他、百周年記念ホールでは、午後に3つの講演会が開催され、最初に「京大人気教員からのエー



ル」と題して、初日は医学研究科・平出 敦教授と人間・環境学研究科・西山良平教授が、2日目は人間・環境学研究科の森谷敏夫教授と川島昭夫教授が講演し、各教員の興味深い研究内容の紹介と語りに、満員の聴衆は熱心に聞き入っていた。次に「京都大学で環境問題に挑む!」と題して、環境保全センター・大寫幸一郎センター長と浅利美鈴助教が、京都大学における環境配慮の取り組みや研究を紹介し、最後に「京大生協から見た学生生活・京大キャンパス紹介」と題した講演会が催され、聴衆は真剣な表情で聞き入っていた。

また、在学生が案内するキャンパスツアーも好評で、猛暑の中ハンカチで汗を拭きながら説明に耳を傾け、元気に歩き回る光景が、構内のあちらこちらで見られた。

学部説明会では、午前と午後の2回の時間帯を組み、学部長の歓迎の挨拶や模擬講義、施設見学、研究室訪問、相談コーナー等が実施された。各会場では、教職員や在学生の熱意が伝わったかのように、多くの参加者が真剣な表情で説明に聞き入り、関心の高さがうかがえた。

学部説明会終了後も、参加者はそれぞれ大学構内を自由に散策し、京大ショップで京大グッズを購入したり、時計台記念館前クスノキ周辺や正門前では記念撮影をする姿が多く見られ、京都大学は一日中賑わった。
(学生部)

連続公開シンポジウム「倫理への問いと大学の使命」第1回を開催

京都大学連続公開シンポジウム「倫理への問いと大学の使命」の第1回「専門職倫理と大学教育」を7月29日(日)に時計台記念館で開催した。このシンポジウムは元本学学生による集団暴行事件を受けて大学の倫理教育を学問的に研究するため企画されたもので、本年度と来年度で計4回開催を予定している。

東山紘久理事・副学長の開会挨拶に続いて加藤尚武名誉教授による基調講演があり、その後、工学・法学・医学の倫理教育の現状や課題について、田中一義工学研究科教授、山田 文法学研究科教授、沼部博直医学研究科准教授によるパネル講演が行われた。続いて、水谷雅彦文学研究科教授の司会で、基調講演者・パネリストによるパネル討論が行われた。参加者は約120人で、質疑応答では一般市民の方が



パネル討論の様子

ら活発な発言があった。

第2回「生命倫理とケアの教育と実践」は今年12月16日(日)に開催の予定。

(学生部)

部局の動き

こころの未来研究センター設立記念シンポジウム「こころの探求」を開催

こころの未来研究センターは、7月8日(日)に設立記念シンポジウムを時計台記念館において開催した。

本センターは、心理学、認知科学、脳科学、人文科学等を含めたこころの総合的研究拠点として、こころに関する多角的な研究を推進することにより、地球化時代を生きる人のこころのあり方や人間像を描き出すことを目的に本年4月1日に設立された。本センターのミッションは、「こころとからだ」「こころときずな」「こころと生き方」の3領域にかかわる研究の重点的な実施に加え、3領域を繋ぐ融合研究を実施し、その研究活動を通じて、現代社会に顕在化しているこころの問題に対する本質的な解決策

を提言することである。本センターでは、学内はもとより、国内外の研究者・専門家との研究交流を積極的に推進するとともに、公共機関や企業との連携



総合討論「こころの探求」

を通じてセンターの研究成果を広く社会に発信し、
こころについての科学的知識の普及に貢献する。

シンポジウムには、一般を含め学内外から300人を
越す参加があり、尾池和夫総長の祝辞、吉川左紀
子センター長によるセンターの設立経緯などの紹介
に続いて、総合研究大学院大学 長谷川真理子教授に
よる「こころの進化」、ミシガン大学 北山 忍教授
による「文化とこころ」、東京大学大学院 西平 直
准教授による「こころと無心」と題した記念講演が行
われ、最後に記念講演者3人とセンターの教授4人

による総合討論「こころの探求」で締めくくられた。

シンポジウム終了後に、関係者による設立記念祝
賀会が開催され、京都府から麻生 純副知事、京都
市から上原 任副市長をはじめ学外の関係機関から
も多数ご臨席いただき、丸山正樹理事・副学長、松
本 紘理事・副学長の挨拶に続いて、木下富雄名誉
教授の乾杯で祝宴がはじまり、新センターの門出を
祝った。

(こころの未来研究センター)

寄附研究部門の設置

8月1日、霊長類研究所に寄附研究部門「福祉長寿研究部門」が、産官学連携センターに「イノベーション・
マネジメント・サイエンス研究部門」が設置された。今回設置された研究部門の概要は以下のとおりである。

● 霊長類研究所「福祉長寿研究部門」

1. 部 局 名 霊長類研究所
2. 名 称 福祉長寿研究部門
(Department of Welfare and Longevity)
3. 寄 附 者 株式会社三和化学研究所
4. 寄附金額 総額1億5千万円
5. 設置期間 平成19年8月1日～同24年7月31日
6. 担当教員 客員教授(時間雇用) 伊谷 原一
准教授(兼任) 友永 雅己
助教(特定有期雇用教員) 森村 成樹
助教(特定有期雇用教員) 藤澤 道子
7. 研究目的 霊長類の福祉と長寿に関する飼育実
践研究を行うことを目的とする。
8. 研究内容 人間の本性を理解するうえで、人間
とそれ以外の霊長類の比較研究は重
要である。とりわけチンパンジーは

人間と最も近縁で、法令上「ひと科
チンパンジー」と規定されており、
寿命も長い。そこで現代社会が直面
する課題としての高齢化・老化とそ
れに伴う福祉の問題について、
サンクチュアリ(保護区、熊本県宇
城市)に飼育されているチンパンジ
ーを主要な対象として、人間を含め
た霊長類における比較研究をおこな
う。

9. 研究課題 人間の本性を知るうえで発達加齢に
伴う現象の解明は必須であり、福祉
向上の方策の探求は重要だが、現有
組織の構成として霊長類研究所には
そうした課題に焦点をあてた研究部
門はない。本寄附研究部門の設置に

より、新しい学際的な研究分野が開拓されるとともに、発達加齢とくに老化と福祉に焦点をあてた研究の萌芽が育成され、霊長類の総合的な研究をめざす本研究所の研究機能が增强される。本研究所には、人間を含めた霊長類の乳幼児期の認知機能の比較発達に焦点をあてた寄附研究部門が平成18年度に発足している。「福祉長寿研究部門」を新設することに

より、チンパンジーの福祉と長寿に関する基礎的研究を通じて、人間を含めた霊長類の発達加齢現象を解明し、高齢化や福祉といった現代社会の抱える課題を考えるうえで重要な基礎的研究資料を得ることができると。それによって、人間の本性の理解につながる総合的な霊長類研究をさらに推進することが期待される。

●産官学連携センター「イノベーション・マネジメント・サイエンス研究部門」

1. 部 局 名 産官学連携センター
2. 名 称 イノベーション・マネジメント・サイエンス研究部門
(Innovation Management Science)
3. 寄 附 者 日本ベンチャーキャピタル株式会社
4. 寄附金額 総額 3 億円
5. 設置期間 平成19年 8 月 1 日～同24年 7 月31日
6. 担当教員 寄附研究部門教授 木谷 哲夫
寄附研究部門准教授 瀧本 哲史
寄附研究部門准教授
(平成19年10月 1 日採用予定)
寄附研究部門助教
(平成19年10月 1 日採用予定)
7. 研究目的 本部門においては、従来、経験と勘で対応を迫られてきたベンチャーの経営について、活動データのモニタリングと分析を中心とした科学的なアプローチを通して、その成功と失敗の規定要因を抽出しようとするものである。従来は、その活動データ、特に販管費に分類されるものについて

では、ほとんど採取されることはなく、客観的な分析も不可能であった。本部門においては、経済学のトランザクション・コストの概念を援用し、標準化された分類に従い、多くのベンチャー企業のデータを取得し、比較・分析を行う。どのような要因が統計的に優位な水準で、ベンチャー経営の成功と失敗を分けているかについて、その知見を抽出し、実際にベンチャー育成に活用しようとするものである。

8. 研究内容 ベンチャー育成開発ノウハウの研究・蓄積と人材育成
9. 研究課題
 - ・ベンチャー企業の諸活動に関しての定量データの収集・分析
 - ・ベンチャー支援ノウハウの抽出・蓄積
 - ・マネジメント・メンバーに対する能力開発・人材育成

寸言

人生最大の財産は「人」

平田 康夫



冒頭、自己紹介をさせていただくと、1967年に京都大学工学部電子工学科の修士課程を修了後、教えを頂いた先生のお勧めもありKDD(現在のKDDI)に入社し、以来40年、関西弁が抜けきれないまま、主に東京およびその近辺において、研究活動、企業経営に携わってきました。縁あって今年の6月より、京都府の最南端「けいはんな学研都市」にある株式会社国際電気通信基礎技術研究所(ATR)に席を置くことになりました。出身地が大阪でもあり、まさに40年ぶりの里帰り、Uターン族の一人です。

この世に生を受けて65年。これまでに何千、何万という数多くの人々との出会いがあり、お付き合いをいただき、お世話になりました。自分が今あるのもそれらの方々のお蔭と常々感謝しています。中でも京都で過ごした6年間の学生時代に知り合った方々から得たものは計り知れません。教えを受けた先生、同僚、先輩、後輩、飲み仲間、下宿のおじさん、おばさん、友達の友達などなど、懐かしい思い出とともに、今も色々な方々と引き続きお付き合いを頂いています。

ところで、最近の学生は勉強をしない、遊んでばかりいるという声をよく耳にしますが、私も1,2回生の教養時代は、まさにその「最近の学生」そのものでした。よく遊び、よく飲み、飲んで、遊んでの毎日でした。そんな中、全学あげての大学祭「11月祭」の日にしたか酔っぱらって入ったのが、近衛通りに新しく開店された小さな喫茶店です。そこで、その日に知り合った飲み仲間とカウンターで共に飲み、大いに氣勢をあげた夜のことが記憶に鮮明に残っています。その日のご縁で、下宿からも雀荘からも近いその喫茶店に足繁く通うこと、いや入り浸ることになりました。特に、喫茶店主の若夫婦の寛大さ、面倒見の良さのお蔭で、学生の方際、親のすねをかじる身分を省みず、5年半の長きに渡り「付け」で、飲み食いをさせていただきました。余談になり

ますが、その後、「付け」での飲み食いの癖が直らず、店を出る際にレジでお金を払わず、「お客さんお金をまだ頂いていませんが・・・」と呼び止められ恥をかいた経験を何度かしたことがあります。

6年間の自由気ままな学生生活を終え、東京での社会人生活をスタートした後も、出張やプライベートな用事で京都へ行く度に、時間が取れるとその喫茶店を訪れ、学生時代の気分そのまま接していただきました。その喫茶店は、名前を「円居(まどい)」といいます。その後、百万遍に店を構えられ、さらに3人の息子さんたちも立派に成長され、後を継いで京都のみならず東京においてもフランスレストランの店舗を次々と拡げられています。京大吉田キャンパス時計台1Fのレストラン「ラ・トゥール」、桂キャンパスの「ラ・コリーヌ」や百万遍の「ルヴェソン ヴェール」をご存知の方も多と思います。7,8年前からは、東京にも進出され、本郷の東大正門前や東大駒場キャンパス内にレストラン「ルヴェソン ヴェール」を開店されました。手ごろな値段で美味しいフランス料理を楽しめる京都発レストランの東京進出は、大変喜ばしいことでもあり、同店の営業活動にご協力させていただくとともに、大小取り混ぜ様々なパーティや懇親会の会場として、引き続き「付け」でもって、大いに活用させていただいています。

京大入学以来50年近くにもわたり途切れることなく親しくお付き合いを頂いている事例のひとつを紹介させていただきましたが、その他、大学時代の恩師、同僚、下宿のおばさん始め多くの方々と今も親しくさせていただいています。京都大学の自由な学風、学生を大事にしてくれる京都人の気質のお蔭と心より感謝しています。多感な学生時代を京都そして京都大学で過ごせたことは私にとって何よりの幸運であったと感じる次第です。

最後になりますが、人生にとって最も大切な財産は「人」です。信頼関係の上に成り立つ「人との繋がり」に勝るものはありません。潤いのある充実した心豊かな社会生活をおくる秘訣は「出会いを大切に」、「人から学ぶ」ことを心がけることにあると思います。

(ひらた やすお (株)国際電気通信基礎技術研究所(ATR)社長 昭和40年工学部卒)

随想

未練

名誉教授 坪内 良博

京都大学を定年退職してから、6年と数ヵ月が過ぎた。定年後の生活は、個人によって多様だが、時間の経過によって規定される側面もある。日本国民の場合、年金受給資格が得られる65歳までは、何



らかの形で働き続けるというのが仕組まれたパターンになっている。大学教員の場合、社会人としてのスタートが遅い分だけ引退も相応に遅いのが通例である。それにつけても、日本人の平均余命は著しく伸びており、働き過ぎという非難を別にすれば、健康的にはしばらく仕事を続けることに問題はない。地域研究という専門分野で私のフィールドであったマレーシアでは、大学教員を含む公務員の定年は55歳とされていて、友人の多くはずいぶん前に大学を去ってしまった。実地調査のフィールドであった東海岸のクランタン州でも、世話になった地方行政の末端に連なる人々も年金生活に入って久しい。

18歳で入学して以来、学びと働きの場として45年間通い続けた京都大学を去るとき、学会関係の役割を含めてこの大学に在籍することで発生した絆の多くを、一度精算しようと考えた。国立大学では最初の講座として、東南アジア研究センター(当時)に設置された人口論講座に、初代の小林和正教授の後任として在籍したことからかわりが深くなった人口関係の学会理事も、任期途中で辞任を申し出た。これまでに培った知識と、溜まったまま重ねられた資料を手元に、当分は気楽に教えられる職場とそれなりの収入を確保し、余裕を持って次の人生に移行しようという思いがあった。

社会学を専攻して大学院時代を過ごしたのだが、人生のかなりの部分を、人文社会科学の境界領域の中で模索しながら過ごした。東南アジア研究センターに在籍した期間が長かったが、当時のアジアでは

人口過剰が大きな問題で、日本では専門的な教育体制がなかった人口学を学ぶ機会にも恵まれたし、歴史人口学の手法にも比較的早い時期に出会った。同僚に多くの理学部や農学部出身の研究者がいたので、環境や稲作を中心に、自然科学系分野との共同作業も多く、総合的な地域研究を目指す機運の中で日々を送った。

世界の変化は加速化し、自然環境との相関の中で伝統を残しながら存続する地域を捉える作業は、ある意味では成功し、ある意味では失敗した。予測を超えたのは、自然環境の変貌と宗教の働きの強化であった。農業は近代化路線の中で生態とのかかわりを失い、近代化とともに衰退すると予想された宗教は純化され、強化される側面を顕にした。1970年頃に過ごしたマレー半島東海岸のクランタン州で、その頃には「情熱の恋の浜」と呼ばれていた海岸が、いつの頃からか「名月の浜」と改称されたことも、モスクに通う人々の服装の変化や女性の黒髪を隠すトンの着用とともに印象深い。

現代に先行する植民地時代というのは、東南アジアに対しては、現代の激変に匹敵する大きな変動をもたらした。大きな流れのなかの東南アジア社会を、比較的長い時間軸の中で、数量化されたデータを踏まえ、現場との往復を重ねながら再考するのが定年後の楽しみであり、もくろみであった。

現在勤務している女子学園は、それなりの歴史と伝統を有し、4万人をこえる同窓生には名門意識を保持するむきも多い。他方、日本社会の変化と少子化は、この種の教育機関が、教養主義を維持しつつも、実学志向を大幅に導入することを要請しているように見える。予定になかった学長職を課せられて、自由な時間を大幅に失っている。当初の計画の実現が困難なことを意識しながら、僅かな時間を未練ともいえる研究作業に割く昨今である。

(つぼうち よしひろ 平成13年退官 元大学院アジア・アフリカ地域研究研究科教授、現甲南女子大学学長、専門は東南アジア研究)

洛書

所変われば……

高山佳奈子

数年前から国際学会の仕事をしているものの、外国に住んだ経験はあまりなく、1998年から2000年にかけてドイツのケルン大学に留学したときだけである。同じ刑法研究室の後輩たちもなかなか留学の機会を得られなかったが、幸い、この夏から、2人が公的資金を得て渡独できることになった。彼らへのはなむけの言葉に代えて、何か役に立ちそうなドイツ滞在のヒントはないだろうか。思いつくままに書き留めてみた。



<生存レベル>

1. 「横断歩道では車が止まってくれるが、歩行者が自転車ゾーンに入るのは自殺行為である。」京都で歩道や横断歩道に設けられている自転車通行帯は、ほとんど守られていない。しかしドイツでは、通行区分を守らないと、疾走する自転車乗りにはねられるか、罵倒されるかのいずれかとなる。運良くこれらを免れても、おまわりさんが来て歩行者にも過料(日本の反則金のようなもの)を科す。
2. 「乾杯のとき目を合わせないと嫌われていると思われる。」日本では、相手の目を直視すると「うざったい」と思われがちだが、ドイツでこれを避けると最低な人になってしまう。

<人レベル>

3. 「げっぷはおならとみなされる。」出しまつたら「ごめんなさい」と言う。
4. 「鼻をすするのは鼻水を口から飲むのと同じ。」ティッシュペーパーは、化粧室や寝室など、人の見ていないところで使うものだというイメージが日本では強いが、ドイツでは堂々と鼻をかもう。
5. 「口に食べ物が入っているときにしゃべらない。」
6. 「許される酩酊の程度は日本よりはるかに低い。」平均的なドイツ人は大きいのであまり酔わない。少し飲んで、冷めた頃に車を運転して帰る人が多い。日本人並みに酔うと恥。

<お行儀レベル>

7. 「お皿は持ち上げない。」
8. 「プレゼントをもらったらその場で開けて喜ぶ。」日本で大切に家に持ち帰って開け、お礼状を書いたりするのと少し違う。なお、プレゼントや花束の無駄な包装は環境を破壊するものと考えられている。レジ袋は当然有料である。
9. 「全員にあいさつしてから帰るように努める。」来たときと帰るときのあいさつは非常に面倒だが、ドイツではきちんとごあいさつのできることが社会生活の第一歩である。
10. 「両頬を合わせるあいさつやウインクをされても、惚れられているわけではない。」慣れないうちは悲鳴を上げたりなどして周囲の人に迷惑をかけた。
11. 「カジュアルセックスは日本より普及している。」大学の入学ガイダンスの際に、町の銀行がエイズ防止キャンペーンとしてコンドームを配布していた。HIV感染率は日本より高い。感染症や不本意な妊娠には十分注意したい。
12. 「男性は店に入るとき、階段を降りるときは前、歩道では車道側を歩こう。」いわゆるレディーファーストである。強い人が前、重い人が下、といったルールのほうが合理的な気がするが、そうっていない。
13. 「レストランを出るときは男性が女性にコートを着せる。」日本では、昔の映画などで、夫が外出するときに妻が上着を着せる様子を見かける程度なので、違和感がある。
14. 「部屋で2人きりになっても、泊まっても、相手にその気があるわけではない。」日本のかつての刑事裁判では、強姦事件の被害者が独りで加害者の家を訪れたり、自宅に加害者を招いたりした事情があると、「落ち度」として評価され、加害者の責任が軽くなる場合があった。現在そうした傾向は弱まりつつあるが、ドイツでは、合意がない限り手を出さないという了解がより徹底されているように思われる。

(たかやま かなこ 法学研究科教授, 専門は刑法)

話題

第10回「高校生のための化学～化学の最前線を聞く・見る・楽しむ会～」を開催

化学研究所が「第10回 高校生のための化学」を7月28日(土)に開催した。高校生を対象に、最先端の研究現場や、楽しみながらできる化学実験を通して、より化学に親しんでもらおうと平成10年から毎年7月の最終土曜に開催している。

宇治キャンパス内の木質ホールに集まった110人の参加者は、江崎信芳所長からの概要説明を聞いた後、12のサイトに分かれ、化学研究所の教員や大学院生たちと一緒に実験に取り組んだ。

遺伝子情報のデータベースにアクセスして、タンパク質の構造を見るサイトでは、3次元のカラフルなタンパク質の画像をクルクル動かして、さまざまな角度から確認したり、別のサイトでは、超臨界



この目でDNAを観察しよう！植物が環境に適應する秘密を探る



サイト別討論会

水に浸したペットボトルのかけらが高温の炉の中で溶ける様子を観察した。また、マイナス196度の液化窒素を使った実験では、テニスボールを凍らせるときに激しくはじける気泡の音や白い煙に驚かされたり、軟式の野球ボールがこなごなに割れたり、目の前でおこる化学の不思議に参加者は興味津々であった。

午前、午後と合計2ヶ所のサイトを見学した後、木質ホールにて、担当の教員や大学院生を囲んでのサイト別の討論会が行われた。実験に関する質問から、進路やその他のさまざまな話題に広がり、話は尽きなかった。

(化学研究所)

ひらめき☆ときめきサイエンスーようこそ大学の研究室へー
「地下浸水時の怖さを体験しよう」を開催

防災研究所宇治川オープンラボラトリー(京都市伏見区横大路下三栖)では、7月28日(土)に「ひらめき☆ときめきサイエンスーようこそ大学の研究室へー地下浸水時の怖さを体験しよう」を開催した。

当日は、小中学生と保護者、総勢38人が参加、午前は防災研究所の戸田圭一教授から「都市水害と地下浸水」の講義があり、午後からは実物大模型を使った避難体験実験を行った。

避難体験実験では、京都の鴨川が氾濫した場合を想定し、京都市内の御池地下街模型に水を流し、浸水していく様子を観察した後、ドアにかかる水圧を



浸水したドアに挑戦

確かめる実験に挑戦、水深20cmから50cmで浸水時のドアの押し開けの困難さを体験した。次に、高さ3mの実物大の階段模型を使用し、階段うえから流れ込む水量を変えて、階段を上る体験をした。参加者からは、「地下街からは、水が流れ込む前に避難することの大切さを実感した」との声が聞かれた。

また、参加者のアンケートでは、小学生からは、「水のこわさがわかったので、すごくいい体験になりました」、中学生からは、「実験内容が非常にわかりやすく、オリジナリティーあふれるものだったので大変楽しかった」、保護者からは、「普段、体験出来ない貴重な体験をさせてもらい、子供にとっても忘れられない夏休みの思い出となった」等多くの意見が寄せられた。



流れ込む水の中、階段に挑戦

(防災研究所)

訃報

このたびは、辻川郁二^{つじかわいくじ}名誉教授、熊田^{くまだ} 誠^{まこと}名誉教授が逝去されました。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

以下に両名誉教授の略歴、業績等を紹介します。

辻川 郁二 名誉教授



辻川郁二先生は、4月19日逝去された。享年82。

先生は、昭和21年東京帝国大学理学部化学科を卒業後、東北大学金属材料研究所助手、講師、助教授を経て、同38年本学理学部教授に就任

され、分光化学講座を担当された。また、東北大学金属材料研究所併任教授、岡崎国立共同研究機構分子科学研究所併任教授、日本物理学会理事を歴任するとともに、磁気光学国際シンポジウム(昭和62年)、低温国際会議(同62年)の組織委員を務める等、物理と化学を結ぶ物性化学の分野において指導的役割を果たし、国際的研究交流に尽力された。京都大学においては、昭和54年より京都大学評議員および全学の液体ヘリウム供給施設である京都大学理学部極低温研究室協議委員会の委員長を永年にわたって務め、京都大学における極低温物性研究の発展に多大なる貢献をされた。昭和63年停年により退官さ

れ、京都大学名誉教授の称号を受けられた。

先生は、配位化合物の分光学的研究、グラファイトなどを母体とする層間化合物の磁性および超伝導の研究、混合原子価錯体の光物性および伝導物性の研究において多大の業績をあげ、国内外で高く評価された。特に、ルビー中のクロムイオンの線状吸収スペクトルの詳細な研究は世界的に注目され、世界初のレーザーであるルビー・レーザーの開発の契機となった。また、カリウム・グラファイト層間化合物が極低温(120mK)で超伝導を示すことを初めて明らかにし、グラファイト層間化合物の超伝導研究の先駆けとなった。白金混合原子価錯体においては、一次元金属が示す特異的な金属・絶縁体転移の系統的研究や原子価交替の不整合の光誘起効果の発見などを行い、当該分野の展開に大きく貢献した。これら一連の活動により、平成15年4月勲三等旭日中綬章を受けられた。

(大学院理学研究科)

熊田 誠 名誉教授



熊田 誠先生は、6月28日逝去された。享年88。

先生は、昭和18年京都帝国大学工学部工業化学科を卒業され、東京芝浦電気株式会社勤務の後、大阪市立大学理工学部助手、講師、助教授、教授を経て同38年本学工学部教授に就任され、合成化学科有機金属化学講座を担当された。昭和58年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。

先生は有機金属化学、特に有機ケイ素化学、遷移金属触媒反応の分野で先駆的な研究をされ、この分野の発展において指導的な役割を果たすとともに、

多くの人材を輩出された。昭和42年アメリカ化学会のF. S. Kipping賞を日本人として初めて受賞されるとともに、同49年有機合成化学協会賞、平成6年には日本の学術分野の賞として最も権威のある恩賜賞・日本学士院賞を、また同8年には有機合成化学協会特別賞を受賞された。

先生はまた、有機合成化学協会関西支部長、近畿化学協会有機金属部会長、国際学術誌Journal of Organometallic Chemistry誌東洋地区責任編集者、第7回国際有機ケイ素化学会議組織委員長などの要職を歴任された。これら一連の教育研究活動、学会活動により、平成5年11月に勲三等旭日中綬章を受けられた。

(大学院工学研究科)

公開講座

京都大学21世紀C O E「物理学の多様性と普遍性の探究拠点」

第5回 市民講座 「宇宙と物質の神秘に迫る～物理科学最前線～」

1. 日 時：9月30日(日) 13:00～17:00
2. 会 場：時計台記念館(百周年記念ホール)
3. プログラム：特集テーマ「物理科学のこれから」

「光で物質をあやつる」

理学研究科物理学第一教室 教授 田中耕一郎

「赤外線で見通す銀河系 –木も森もみたい–」

理学研究科宇宙物理学教室 教授 長田 哲也

「素粒子の「溶ける」話 –超高温・高密度の世界の探求–」

基礎物理学研究所 教授 國廣 悌二

講演終了後、17:30～18:30に、講師の方々と歓談できる簡単な茶話会を開く予定です。

4. 受 講 料：無料(但し、茶話会については実費として500円を当日頂きます)
5. 対 象：中高校生以上
6. 定 員：500名(申込多数の場合は、申込ハガキまたは電子メール先着順)
7. 申 込 方 法：往復ハガキまたは電子メールに、住所、氏名、年齢、職業、電話番号、茶話会への出席希望の有無、をご記入のうえ下記にお送りください。

〒606-8502 京都市左京区北白川追分町 京大理学部 物理学第二教室内

京都大学21世紀C O E事務局 市民講座「宇宙と物質の神秘に迫る」係

T E L：075-753-3758

E-mail：shimin07@cr.scphys.kyoto-u.ac.jp

8. 申 込 締 切：9月20日(木)必着 定員オーバーの節はご了承ください。

主 催：京大21世紀C O E「物理学の多様性と普遍性の探究拠点」

後 援：京都府教育委員会、京都市教育委員会、京都新聞社、物理教育学会、天文教育普及研究会、

教育学研究科附属臨床教育実践研究センター公開講座

『イメージにあらわれる「文化」と「意識」—光と影の象徴表現—』

1. 日 時：10月8日(月・祝) 13:00~17:00
2. 場 所：時計台記念館国際交流ホールⅢ
3. 講 師：京都大学大学院教育学研究科客員教授 シェリー・レンム・シェファード
京都文教大学教授／京都大学大学院教育学研究科客員教員 名取 琢自
4. 対 象：市民一般，心理臨床専門家，教育関係
5. 受 講 料：2,500円
6. 定 員：60名(先着順)
7. 申 込 締 切：9月20日(木)
8. 問い合わせ先：京都大学大学院教育学研究科附属臨床教育実践研究センター
TEL：075-753-3052
申込方法など，お問い合わせください。

京都大学森林科学公開講座 「森を食べる —森と木と健康—」

1. 期 日：10月13日(土)，14日(日)
2. 場 所：生存圏研究所 木質ホール 他
3. 演題及び講師：

10月13日(土) 講演会 「森を食べる—森と木と健康—」

森の掃除屋さん“シロアリ” —森林におけるシロアリの生態と役割—

	農学研究科	助 教	築瀬 佳之
森に生きる動物と私たち —ツキノワグマを例に—	農学研究科	講 師	高柳 敦
ナタデココとナノテクノロジー —セルロース食材からナノマテリアルへ—	生存圏研究所	教 授	矢野 浩之
竹を食べる —竹を口にする人間や動物の話— フィールド科学教育研究センター		教 授	柴田 昌三
森を食べるキノコ・キノコを食べる人 —エネルギー循環の視点から— 生存圏研究所		准教授	本田 与一

10月14日(日) 見学・実習

1. 安心・安全の木造住宅を造るために	生存圏研究所	教 授	小松 幸平
2. シロアリや腐朽菌の持つパワーを体験しよう	生存圏研究所	准教授	吉村 剛
3. 木材のミクロな顔	生存圏研究所	教 授	杉山 淳司
4. 体験：森を食べる！	農学研究科	准教授	岡田 直紀
4. 定 員：80名(申込先着順)
5. 受 講 料：5000円／3000円(一日のみ参加の場合)
6. 申込締切日：10月1日(月)
7. 問い合わせ先：〒611-0011 京都府宇治市五ヶ庄 京都大学生存圏研究所 公開講座係
TEL：0774-38-3608／3601 FAX：0774-38-3600
E-mail：forest-kokai2007@rish.kyoto-u.ac.jp
申込方法等の詳細は生存圏研究所ホームページをご覧ください。
<http://www.rish.kyoto-u.ac.jp/events/forest2007/>

主 催：生存圏研究所・農学研究科森林科学専攻

お知らせ

キャンパスメンバーズ等のご案内

京都大学の身分証(またはK C J S の身分証)を呈示すると、(1)～(3)の施設において各特典が受けられます。

(1) 京都国立博物館(京都市東山区茶屋町527 / TEL: 075-525-2473)

奈良国立博物館(奈良市登大路町50 / TEL: 0742-22-7771)



利用対象者	本学学生・K C J S の学生・引率教職員
利用期間	2006年8月22日～2008年8月21日
特典	①平常展, 特集陳列: 無料 ②特別展: 学生割引(引率教職員は一般割引※) ③講堂・茶室・会議室等: 利用料金割引
その他	共催展の料金は別途定められます。 奈良国立博物館の特別展は学生一律400円です。

※学生20名につき引率教職員1名が無料になります。

(2) 茶道資料館(京都市上京区堀川通寺之内上る裏千家センター内 / TEL: 075-431-6474)



利用対象者	本学学生・K C J S の学生・本学教職員 (非常勤教職員等含む)
利用期間	2007年6月25日～2008年6月24日
特典	①無料で通常展・特別展が観覧できます。 ②図録が2割引で購入できます。 ③1階立札席で呈茶のサービスが受けられます。 (10時～16時 団体の場合は要電話予約)

(3) 京都国立近代美術館(京都市左京区岡崎円勝寺町 / TEL: 075-761-4111)



利用対象者	本学学生・K C J S の学生・本学教職員 (非常勤教職員等含む)
利用期間	2007年8月1日～2008年3月31日
特典	①常設展(コレクション・ギャラリー): 無料 ②企画展: 大学生団体料金(教職員は一般団体料金)
その他	学生は、年会費2,000円で「学生特別会員」になることができます。(特典: 各企画展1回目は無料観覧など)

- ・開館時間・休館日等詳しくは各施設のHPをご覧ください。
- ・利用期間を延長した場合等は改めて通知いたします。

詳しくは、京都大学HP>学生生活>博物館などの利用 または、
京都大学HP>お知らせ>掲示板 学内専用掲示板→利用する(京都大学以外の施設)をご覧ください。

問い合わせ先: 京都大学学生部(TEL: 753-2504又は2588)

総合博物館平成19年秋季企画展

「生態学が語る不思議な世界 生物の多様性ってなんだろう？」

この地球上にはさまざまな生物がいて、実に多様な生き方をしています。京都大学生態学研究センターは、この生物の目もくらむような多様性の意味を知ろうと、熱帯林から草原、海、湖、そして実験室、コンピューターの中や分子の世界を舞台にユニークな研究を繰り返してきました。海に満ちる微生物、熱帯林のゾウやゴリラと植物の関係、そして身近なトンボやミツバチのくらし。生き物ってこんなにおもしろかったんだ！

1. 開催期間：8月1日(水)～ 12月2日(日)
2. 開館時間：9：30～16：30(入館は16：00まで)
休館日 月曜日・火曜日(平日・祝日にかかわらず)
3. 開催場所：京都大学総合博物館 2階企画展示室
4. 入館料：一般 400円、大・高校生 300円、中・小学生 200円
上記の料金で、常設展も同時にご覧いただくことができます。
5. 問い合わせ先：京都大学総合博物館
TEL：075-753-3272 FAX：075-753-3277

「テクノ愛'07」

ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー(VBL)は、身近な生活に役立つ技術から最先端技術まで多彩なアイデアを競う発明コンテスト「テクノ愛'07」(テクノ愛実行委員会主催、京都大学VBL・財団法人近畿地方発明センター共催)の開催を予定しており、アイデアを募集しています。本コンテストは、ものづくりから科学技術、また起業化への関心を高めてもらう狙いで毎年開催しており、今年で11回目を迎えました。過去の入賞者の中には、2足歩行ロボットを事業化して起業するなど、入賞アイデアのいくつかは特許出願、商品化されています。また希望者には、起業、特許についての基本的なアドバイスやサポート(起業相談室)も積極的に行っています。

応募アイデアは書類選考を経て11月23日(金)にコンテストにて発表審査し、グランプリを決定します。優秀なアイデアには、表彰とノートパソコンなどの副賞が授与されます。応募資格は、高校生から高専生、大学生、大学院生、ポスドクなどの若手研究者で、募集締め切りは、高校の部が9月12日(水)まで、大学の部(ハイテク部門、生活アイデア部門)が10月12日(金)までとなっています。

1. 発表審査：11月23日(金)
2. 応募資格：高校生から高専生、大学生、大学院生、ポスドクなど(教員以外)の若手研究者
3. 募集締切：高校の部 9月12日(水)、大学の部 10月12日(金)
4. 問い合わせ先：TEL：075-753-7578 E-mail：contest07@vbl.kyoto-u.ac.jp

詳細はベンチャー・ビジネス・ラボラトリーホームページをご覧ください。

<http://www.vbl.kyoto-u.ac.jp/Contest/>

日誌

2007.6.1 ~ 7.31

- | | |
|---------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------|
| 6月4日 役員会 | 7月2日 役員会 |
| 5日 財務委員会 | 5日 大学入試センター試験実施委員会 |
| 〃 大学評価委員会 | 7日 七国立大学総長懇談会 |
| 7日 F D研究検討委員会 | 10日 環境・安全・衛生委員会 |
| 8日 企画委員会 | 〃 企画委員会 |
| 〃 学生部委員会 | 11日 団体交渉 |
| 11日 役員会 | 13日 財務委員会 |
| 12日 部局長会議 | 〃 学生部委員会 |
| 〃 身体障害学生相談室管理運営委員会 | 17日 役員会 |
| 15日 創立記念行事音楽会 | 〃 部局長会議 |
| 18日 創立記念日 | 〃 人事審査委員会 |
| 19日 役員会 | 18日 国際交流委員会 |
| 〃 永年勤続者表彰式 | 23日 役員会 |
| 20日 名誉教授懇談会 | 24日 総長外国出張 防災情報研究拠点の視察
および第10回京都大学国際シンポジウム
「活地球圏科学」出席のため、インドネシ
アを訪問(～30日) |
| 〃 国際交流委員会 | 〃 企画委員会 |
| 〃 外国人留学生歓迎パーティー | 26日 第10回京都大学国際シンポジウム：活地
球圏科学(インドネシア・バンドン)(～
28日) |
| 21日 財務委員会 | 29日 シンポジウム「倫理への問いと大学の使
命」 |
| 22日 第9回京都大学国際シンポジウム「人間
の安全保障のための地球環境学」(於・時
計台記念館)(～23日) | 31日 役員会 |
| 〃 企画委員会 | 〃 教育研究評議会 |
| 25日 役員会 | 〃 全学情報セキュリティ委員会 |
| 26日 教育研究評議会 | |
| 27日 経営協議会 | |
| 28日 役員会 | |
| 〃 人権に関する研修会 | |

隔地施設 紹介



フィールド科学教育研究センター 瀬戸臨海実験所 (<http://www.seto.kais.kyoto-u.ac.jp/>)

はじめに

フィールド科学教育研究センターは、京都大学において今後の地球環境問題に関する教育と研究を担う3本柱のひとつとして、平成15年4月1日に設置されました。その使命は、フィールドに根ざした学問の推進と教育の実践です。その責務を果たすために理学研究科と農学研究科とにばらばらに所属していた、北は北海道から南は徳山まで全国各地に設置されているいわゆる隔地施設が、学部の垣根を取り払って連携し、より広い視点をもった総合的なフィールド科学を創生しようとしております。「隔地施設の紹介」のコーナーでは、フィールド研のこれらの施設をシリーズでご紹介してまいります。トップバッターは、瀬戸臨海実験所です。

沿革

京都帝国大学理学部附属瀬戸臨海研究所として、大正11(1922)年7月28日、当時の和歌山県瀬戸鉛山村(現在の和歌山県西牟婁郡白浜町)から敷地を購入し、番所崎の桔梗平と呼ばれた地に創設されました。その後、昭和5年6月1日昭和天皇行幸1周年を記念し、観覧設備を加えて水槽室を水族館として一般公開を開始しました。昭和12年には附属瀬戸臨海実験所と改称しました。初代の所長は駒井卓教授です。昭和43年には田辺湾にある島島を実験地として取得しました。また昭和56年には当時の藤永所長のご尽力で、老朽化した建物の一部を撤去し、改築する事業を始め、昭和58年に現在の実習室を含む研究棟と宿泊棟が完成しました。さらに平成5年に水族館第1・3・4水槽室を改修・増築しました。そして、平成15年に、理学研究科附属から京都大学フィールド科学教育研究センター附属へと改組して現在に至っています。



瀬戸臨海実験所の全景

所在地と環境

瀬戸臨海実験所は、紀伊半島西岸、紀伊水道から太平洋に出る辺りの田辺湾口に位置しています。実験所の名称は、創設当時の瀬戸鉛山村の名前に因んだもので、瀬戸内海とは関係ありません。実験所は和歌山県西牟婁郡白浜町の西北端、番所崎の頸部の砂洲を占めていて、北は田辺湾、南は鉛山湾に面しています。

瀬戸臨海実験所周辺の気候は温暖で、冬も平均気温は7℃前後あり、雪は稀にしか降りません。ただし、冬の季節風は大変強く、寒さで死んだ海の生物がしばしば北の浜に打ち上げられます。夏の気温は30℃以上になります。雨は6月の梅雨時と9-10月の台風シーズンに多く降ります。

付近の海も、黒潮分枝流の影響を強く受けて温暖で、造礁珊瑚も生息しています。番所崎周辺の表面水温は年平均で約20℃もあり、冬でも12℃以下にはなりません。瀬戸臨海実験所のある田辺湾・鉛山湾周辺の



海洋生物相の30年を超える長期モニタリングが行われている島島実験地

の海岸地形はたいへん複雑で、切立った崖に大小の入江と浜があり、暗礁や小島が散在しています。海底も岩盤・転石・礫・砂・泥など多様な状況を見ることができます。田辺湾中央部の水深は約30mあり、遠浅の砂浜や干潟はあまり発達していません。田辺湾口には番所崎・塔島・円月島・四双島などの岩礁域があり、外洋性の動物群集が見られます。またこれらの岩礁には大小のタイドプールが多数あります。

瀬戸臨海実験所が所有する島島は、田辺湾の南東部に位置していて、内湾系の特徴を多く示します。しかし、多彩な地形・底質を反映して、生物相も多様性に富んでおり、ここだけで湾内一帯の海岸生物相を一通



り観察できるほどです。田辺湾奥には干潟がいくつかありますが、埋立てによって、規模は小さくなってしまっています。

研究と教育

瀬戸臨海実験所が伝統的に主軸としてきた研究分野は、海産無脊椎動物の分類・系統学です。特に刺胞・有櫛・軟体・節足・毛類・原索動物などについては、この分野の発展の中心的な役割を果たしてきました。またこれと同時に、底生動物(Benthos)・浮遊動物(Plankton)各種の分布、生活史、種間関係、行動などに関する生態学的研究も展開してきました。現在も各教員が恵まれたフィールドを活かして、さまざまな海洋生物の自然史に関する研究を行っています。特に近年は海洋の保全生物学や、森里海連環学などの分野でも研究を進めています。

教育面では、多数の臨海実習・少人数セミナーなどを実施するとともに、京都大学理学研究科の海洋生物学分科として、海産無脊椎動物の自然史に関する研究を志す大学院生の教育も行っています。

水族館と社会教育

瀬戸臨海実験所の特徴のひとつが、水族館の併設です。本水族館は博物館法に基づく博物館相当施設で、登録名は京都大学白浜水族館となっています。昨今の多くの水族館は、イルカのショーを行い、ジンベイザメのような話題性の高い動物を集めて、アミューズメントパーク化することによって集客を図っていますが、瀬戸臨海実験所の水族館が展示している水族は、学術的に意義深いものが中心です(例として、イラモを昨年「紅萌(第10号)」に掲載)。現在全国22箇所に国立大学所属の臨海臨湖実験所が設置されています。



アクセス

瀬戸臨海実験所へは、京都駅(または新大阪や天王寺)から、JR西日本の特急「くろしお」か「オーシャンアロー」を使うのが、一番便利です。吉田のキャンパスからですと、約3.5時間とかなり時間がかかります。しかし本学との交流は極めて重要と考え、瀬戸臨海実験所の教員は、手分けをして理学部の講義を前後期1コマずつと、セミナー1コマ・全学共通科目3コマ・ポケゼミ4コマを吉田地区で担当しています。

連絡先 瀬戸臨海実験所

住 所 〒649-2211 和歌山県西牟婁郡白浜町459
電 話 0739-42-3515
F A X 0739-42-4518
<http://www.seto.kais.kyoto-u.ac.jp/>

職員構成

教員6人、事務職員4人、技術職員6人、非常勤職員2人、研修員1人、大学院学生7人、学部学生1人



京都大学白浜水族館

それらの実験所には、水族館が併設されているものが多かったのですが、現存するものは、瀬戸臨海実験所だけになってしまいました。主たる理由は、観客の減少とそれに伴う経費負担の増加です。白浜水族館も、バブルの崩壊後、観客数が激減しました。そこで少しでも観客を増やそうと、所員が一丸となって取り組んでいます。勤務日をやりくりして、平成16年度からは正月期間も含めて年中無休です。またさらに春、夏、冬の学校の休み期間には、小中学生の入館料を無料にし、さらに教員・技術職員が手分けして解説ツアーをほぼ毎日実施しています。またメールニュースを発行し、充実したWEBも作っています。このような努力の成果が実を結び、年間入館者数は平成18年度、6万1千人あまりになりました。本水族館は、京都大学のなかで大きく開いた社会への窓となっているのです。京大の方々も海水浴や温泉旅行などで白浜を訪れる機会はたくさんあると思いますが、そのときはぜひ水族館まで、足を延ばしてください。

アクセス

京都駅から、JR西日本の特急「くろしお」または「オーシャンアロー」を利用
約3.5時間